

インドネシアの日本語教育現場におけるステレオタイプと言語学習の結びつき -ジャカルタの日本語学校フィールド調査から-

中西梓 (広島大学大学院生)

1. はじめに

インドネシアは日本語学習者数が世界第2位であり、学習者の増加に伴い学習目的も留学、就職、余暇活動の一環としてなど多様化している。インドネシアでは日本との経済的な結びつきの強さから、従来から実利的な目的で日本語を学習する人が多かったが、近年では特に若い世代で日本のポップカルチャーを契機として日本語学習を始める人が増えている(国際交流基金2022)。筆者も、現在インドネシアの日本語学習者を対象にオンラインで日本語を教えることから、実際にインドネシアでのポップカルチャー人気を肌で感じている。また、筆者が関わる学習者の中には日本語を学ぶ行為そのものを趣味として楽しむ「余暇活動と消費としての外国語学習」⁽¹⁾として捉えられる日本語学習を行っている学習者もいる。「余暇活動と消費としての外国語学習」の事例として久保田

(2015)では、言語を習得することだけではなく、言語学習の場を楽しんだり、目標言語圏への憧れの気持ちを満たすことが学習の強い原動力となっていたケースが報告されている。

また、瀬尾(2013)によると、教室外で日本語が使われていない外国語環境では、日本人や日本語、日本文化との接触が少なく、日本のポップカルチャーが日本文化の象徴として学習者に受け取られていたことが報告されている。さらに、そこから得た情報が日本や日本文化に対するステレオタイプや憧れのイメージの構築へとつながっていたことが明らかになっている。日本のアニメや漫画、映画、ドラマなどをきっかけに日本語学習を始める人が増えているインドネシアでも、ポップカルチャーがステレオタイプ構築に与える影響は大きいと考えられる。

このような背景から、日本語や日本文化との直接的な接触の少ないインドネシアの日本語教

育現場では、どのようなステレオタイプが構築されているのかを調べるために日本語学校でフィールド調査を行った。今回の調査で行った活動内容や成果、得られた学びについて報告する。

2. 活動の概要

本調査の目的は、インドネシアの日本語教育現場では、インドネシア人日本語教師(以下、日本語教師)およびインドネシア人日本語学習者(以下、学習者)は日本や日本人に対してどのようなステレオタイプを持っているのか、そのステレオタイプはどのように構築され、それが日本語学習とどのように結びついているのかを調査することである。筆者はインドネシアのジャカルタにある日本語学校で1ヶ月間フィールド調査を行った。主な活動は①日本語授業の参与観察②学習者へのインタビュー③日本語教師へのインタビューである。また、調査以外での活動としては筆者が教師として行う日本語の授業の実施、調査協力機関のSNS用動画の作成などを通して日本語教師や学習者との交流を行った。

2-1 調査協力機関について

本調査は IkuZo! Japanese Education Center (以下 IkuZo!) の全面的な協力のもと行うことができた。IkuZo!はインドネシアのジャワ島を中心に9校開校されている日本語学校である。主体は日本語学校だが、manga コース、3DCG コースなどもあり、日本語以外にも漫画やイラスト、デジタルアートなど芸術的なスキルも身につけられる学校となっている。日本にある日本語学校や専門学校とのパートナー提携も結んでおり、日本への留学支援も活発に行っている学校である。



図1 manga コースの学習者の作品

2-2 日本語授業の参与観察

事前に授業を担当する日本語教師の許可を得た上で授業を観察した。学習者には、授業開始前に担当の日本語教師から筆者を紹介してもらう形で許可を得た。簡単な自己紹介と筆者の身分、活動内容などを説明した上で見学に移った。担当の日本語教師によっては授業に入る前に学習者との簡単な交流の場を設け、直接学習者と話す機会をくれる日本語もいた。授業中は基本的にノートに参与観察記録を取り、日本語教師から要望があった場合は会話練習に参加したり学習者からの質問に答えたりした。参与観察記録には時間、授業の流れ、教室の配置、使用教材、日本語教師と学習者のやりとりや様子などを記録した。参与観察中に疑問に思ったことは休み時間や授業終了後、また日本語教師へのインタビューの際に確認した。IkuZo!の授業はオンライン、対面、2つの参加方法があり、クラスは2-6人向けのセミプライベートクラスと完全マンツーマンのプライベートクラス2種類のクラスが用意されている。筆者は対面のセミプライベートクラスを観察した。

2-3 学習者へのインタビュー

IkuZo!の日本語学習者6人にインタビューを

行った。協力者は「IkuZo!の生徒で日本語でのインタビューに応じてくれる人」という条件で日本語教師に紹介してもらった。インタビューの前にインドネシア語に翻訳した同意書を見せながら口頭で説明し、了承を得た上でインタビューを行った。基本は日本語でインタビューを行い、説明が難しい際は英語やインドネシア語、また日本語教師が近くにいる場合は通訳してもらった。インタビューは1人につき30分程度でIkuZo!の教室内で行った。事前に作成した質問リストを元に、半構造化インタビューを行った。質問リストの内容は主にこれまでの日本語学習経歴や学習動機、来日の有無や日本・日本人に対するイメージ、そのイメージが作られる要因となったものなどである。

2-4 日本語教師へのインタビュー

IkuZo!の日本語教師4人にインタビューを行った。日本語教師へのインタビューは筆者自ら依頼し、学習者へのインタビュー同様事前に同意書を見せながら口頭でも説明を行い、了承を得た上で実施した。インタビューは1人1時間程度で授業以外の時間でIkuZo!の教室内で行った。

日本語教師へのインタビューは主に、日本や日本人に対するイメージ、日本での経験、そしてこれまで授業で日本文化や日本に関することについてどのようなことを学習者に教えてきたかについて尋ねた。

2-5 学習者との交流

調査以外の活動としては、IkuZo!の学習者を対象とした日本語の授業を2回開講し筆者が授業を担当した。IkuZo!の公式SNSで告知を行い、自由参加型で1回目は14人、2回目は4人の学習者が参加した。また、IkuZo!の学習者と一緒に公式SNS用の動画撮影を行った。動画内では学習者と日本語を使った簡単なゲームを行い、参与観察以外での貴重な交流の機会となった。

3. 活動の報告

3-1 日本語授業の参与観察の結果

授業は1コマ90分で出席確認から始まる。基本的には学習者それぞれが自身のペースで日本語の教材を解き進めていく自習スタイルを取っているが、日本語教師は各学習者の学習進度を把握しながらある程度問題数をこなしたタイミングで簡単な質問をしたり小テストをして理解度を確認し、それに合わせて説明を補足したり学習者からの質問に答えている。学習者のレベルや学習内容にはばらつきが見られたが、ほとんどが初級の学習者だった。初級の教材は「みんなの日本語初級Ⅰ、Ⅱ」を元に作成されたオリジナル教材が使われており、文字語彙、文法理解中心の授業が行われていた。そのため、改めて授業で日本語教師が日本文化や日本人に言及する場面は少なかった。

授業の雰囲気や日本語教師と学習者および学習者同士の関係性も、担当の日本語教師や授業の曜日、時間によって異なる。午前中の授業は比較的成人学習者や留学、就職を控えた成人学習者が多かった。午後の授業は学校帰りの習い事として通っている中高生が多く、スクールバックや制服を身に付けて授業に参加する学習者の参加も観察できた。担当の日本語教師から「今日の学校はどうでしたか」「学校で何を勉強しましたか」など学校での様子を聞かれている場面もあり、中高生の多いクラスの方が学習者同士のやりとりも多く賑やかな印象であった。中には、授業時間外に日本語教師を含めた授業の参加者でオンラインゲームを頻繁に行っているというクラスもあり、日本語教師と学習者のカジュアルな関係性も観察できた。

3-2 学習者へのインタビューの結果

学習者6人へのインタビューの結果、協力者全員がアニメやJ-popなど日本のポップカルチャーへの興味が日本語学習を始めた動機の1つとなっていた。中には、中学や高校の授業に日本語があったことや、仕事で日本人との関わりがあることも合わせて学習を始めるきっかけと

なったケースもあった。国際交流基金(2022)によって、インドネシアでは近年特に若者の間でアニメ・マンガ・J-POPを契機として日本語を学習する若者が多いと報告がされているが、IkuZo!の日本語学習者においても共通する結果を確認できた。協力者に現在の日本語学習の目的を聞くと「日本へ留学したい」「日本の会社で働きたい」「仕事に役立てたい」など、学習を継続するうちにキャリアと直接的に結びついた動機へと変化している様子が見られた。また、就職、進学、旅行など目的は異なるが、協力者全員に「日本に行きたい」という思いが共通していた。

日本のイメージに関しては、「きれい」という回答が全員に共通しており、その他には「テクノロジーが発展している」「道や建物が整備されている」などインフラや技術面への評価が高いことが共通の認識としてあることが確認できた。また、日本人へのイメージに関しては「礼儀正しい」「親切」「優しい」などの印象を持っていたが、「時間に厳しい」「ワーカホリック」「ハードワーキング」など時間や仕事に対しては厳しいイメージを持っていることが明らかとなった。日本の女性のイメージ、男性のイメージをそれぞれ尋ねたところ、日本人女性のイメージは「可愛い」「綺麗」「声や笑顔が可愛い」など外見的な特徴が多く挙げられた。それに対し日本人男性のイメージは「カッコいい」「面白い」「大人しい」「ハードワーク」「ワーカホリック」など様々であったが、仕事に関するイメージが比較的多く挙げられた。

どのような媒体または経験からそれぞれのイメージを持つようになったのかという質問に対しては、アニメやドラマまたはYouTube、SNSなどインターネットの情報、旅行で日本を訪れた際の経験や身近な人の日本での経験談などが挙げられた。授業中の日本語教師の説明や教科書の記述などについてはほとんど述べられなかった。

学習者は日常的にYouTubeでそれぞれの興味ある日本についての動画を見ていたり、好きな

日本人アーティストの SNS をフォローしていたり、教室外で様々な媒体を通して日本に関するコンテンツに触れる機会が多いことがわかった。またそういった行為を日本語学習のためというよりは趣味として、楽しむことを目的にしている様子が見えた。このような様子や授業内外での学習者同士の交流から「余暇活動と消費としての外国語学習」として日本語学習を行っている学習者がいることが確認できた。

3-3 日本語教師へのインタビューの結果

日本語教師へのインタビューの結果、日本や日本人に対するイメージに関しては、日本のイメージは「きれい」、日本人は「時間に厳しい」「やさしい」など学習者へのインタビュー結果と共通する回答が得られた。しかし、「アルバイトの時、出勤時間は1、2分も遅れてはいけない」「真面目だけど不真面目な人もいる」「仕事の時と遊んでいる時は違う」など、実際に日本で働いた経験や関わった日本人との具体的なエピソードを元に語られることが多かった。さらに、日本に住んだ経験のある日本語教師の日本や日本人に対するイメージは、元々持っていたイメージに加えて日本での経験を元にアップデートされていることがわかった。

授業で日本文化や日本に関することについてのどのようなことを学習者に教えているかについては、授業の中でそのようなことを自分から発信する機会は少ないという日本語教師が多かった。これは IkuZo! のカリキュラムや授業スタイルの影響も考えられる。自分から積極的に発信はしないが学習者から質問があれば答えるとし、その上で話すならゴミの分別といったような生活のルールや、日本で働く上での時間の認識について話すことが多いと回答が得られた。日本語教師として日本の文化や日本人について教える立場にあるというより、どちらかというところから日本に行く学習者に日本生活経験者としてアドバイスを行う先輩のような立場にあると捉えることができた。

また、20 代後半以上の日本語教師に共通して

いたのが、インドネシアのテレビ番組でのアニメ放送により、幼い頃から日本のアニメに親しみを持っていたということだ。20 代後半の日本語教師たちが幼い頃はまだインターネットがあまり普及しておらず、日本語の授業やテレビ以外で日本についての情報が得られる手段は限られていた。そのためテレビ番組やアニメ、日本語の授業内の活動や日本語教師の発言が与える影響が大きかったことが考えられる。それに加え、「今の生徒はインターネットや SNS から日本に関する情報が簡単に入手できるから、生徒の方がなんでも知ってる」という日本語教師の語りからも、時代の変化によって情報を得る手段も多様化していることが確認でき、ステレオタイプが構築される過程やその要因となるものも変化していることがわかった。

3-4 調査以外の活動

調査以外の活動では、日本語の授業と IkuZo! の SNS 用の動画撮影を行った。筆者が担当した2回の日本語の授業では授業の最初にアイスブレイクの時間を作り、授業中でもなるべく学習者とのやり取りが行えるように質問を投げかけたり学習者の意見を聞く場を設けた。日本人と実際に交流する機会は少ないため、学習者は緊張の様子を見せながらも筆者を歓迎してくれた。はじめは自信のなさや恥ずかしさから日本語で話すのを躊躇っていたが、徐々に打ち解け、授業後に個人的な日本での経験や将来の希望などを話してくれる学習者もいた。

授業や動画撮影を通じて学習者との交流が深まり、その後のインタビューでもより自然な態度で語ってもらうことができたと思う。



図2 筆者による授業の様子



図3 筆者が担当した授業の参加者

4. 結果のまとめと考察

本調査ではインドネシアの学習者や日本語教師が日本や日本人に対してどのようなステレオタイプを持っているのか、そのステレオタイプはどのように構築され、それが日本語学習とどのように結びついているのかを参与観察やインタビューから調査した。

IkuZo!でのフィールド調査により学習者、日本語教師は共通して日本に対しては「先進的な国」「きれいな国」というイメージを持っていることがわかった。日本人に対しては「礼儀正しい」「親切」「優しい」などのイメージを持っていたが、時間や仕事面では厳しいイメージを持っていた。男女別でそれぞれのイメージに対する回答では日本人男性は仕事のイメージが強く、日本人女性は外見的な回答が多く得られた。そこには男女のジェンダー的なステレオタイプが反映されているとも考えられる。

ステレオタイプの構築については、特にインターネットやSNSからの情報や、日本で実際に体験したことや身近な人の日本での経験談を聞いたことによる影響が大きく、授業内での日本語教師の発言や教材からの影響は少ないことがわかった。これにはこの学校の特色やカリキュラムの影響も関係していることが考えられる。また、インターネットやSNSの普及により情報を得られる手段が多様化し、ステレオタイプが構築される過程も変化していることが推察できる。昔に比べて得られる情報の量も増えてお

り、インドネシアにいながら日本の情報が簡単に入手できるようになったため、学習者にとって日本に関するコンテンツを見たり共有したりすることは日常的な行為になっていることが考えられる。そして、近年技能実習制度の拡大や円安などの影響により、就職や旅行、それ以外でも実際に日本に行く人が増えている。そのため家族や友人、知り合いなど身近な人から日本について経験談を聞く機会も増えているのではないだろうか。

5. おわりに

経済的なつながりからインドネシアには日本製品や日系企業も多く進出しており、それに加えてポップカルチャー人気の影響から、日本語学習経験の有無に関わらず、インドネシアに住んでいる人にとって日本は小さい頃から「身近な存在」であるということが考えられる。筆者も実際にインドネシアで生活する上で、日本食レストランや日本の製品の多さに驚いた。街中では日本語がデザインされた服を着る人や日本製品以外にも日本語がパッケージに表記されている製品も多く見かけた。ありとあらゆる場所で日本の、あるいは日本的なものが浸透しているインドネシアにおける日本の立ち位置を改めて考えた上で研究を進めていく必要があると感じた。

本稿ではインドネシアの日本語学校でのフィールド調査による活動報告を行った。これまでもインドネシアの学習者や友人と関わる機会があったが、現地で調査することでしか得られない貴重な気づきや学びが多くあった。

特に、日本人との直接的な接触の少ない環境では筆者自身が「日本代表」として日本文化や日本に関することについて質問されたり意見を求められることも少なくなかった。そこで、改めて自分自身が誤ったステレオタイプを生産してしまったり偏見を強める存在になりうるということを体感した。それは今後も研究を進める上で忘れてはいけない視点だと考えている。

今回の調査では、インドネシアの日本語教師

や学習者は日本や日本人に対してどのようなステレオタイプを持っているのか、そのステレオタイプはどのように構築されそれが日本語学習とどのように結びついているのか調査を行ったが、今回調査を行った協力機関の性質や協力者の環境を踏まえた上で更なる分析が必要である。また、ステレオタイプと日本語学習がどのように結びついているのかは今回の調査で明らかになっていない。今後の課題としてさらに調査、分析を進めていきたい。



図4 IkuZo!の先生方

注

- (1) 久保田竜子 (2015) 「余暇活動と消費としての外国語学習—楽しみ・願望・ビジネス英会話を考える—」『グローバル化社会と言語教育—クリティカルな視点から—』奥田朋世 (監訳) くろしお出版, 91-114.

参考文献

- (1) 久保田竜子 (2015) 「余暇活動と消費としての外国語学習—楽しみ・願望・ビジネス英会話を考える—」『グローバル化社会と言語教育—クリティカルな視点から—』奥田朋世 (監訳) くろしお出版, 91-114.
- (2) 国際交流基金 (2022) 『インドネシア (2022年度)』 <<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2022/indonesia.html>> (2024年4月10日)
- (3) 瀬尾匡輝 (2013) 「海外の高等教育におけるアカデミック・ジャパニーズとは—香港の学習者へのインタビューを通して—」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』5, 55-63.